



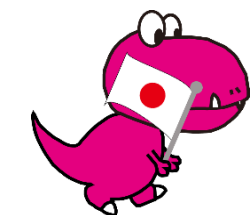
2021年 秋の特別展

官営八幡製鐵所開業120年

鉄の都のものがたりー釜石と八幡ー



北九州市と岩手県釜石市は製鉄業のまちとして歴史的なつながりがあり、平成27(2015)年7月には釜石市の橋野高炉跡と北九州市などの官営八幡製鐵所関連施設を含む「明治日本の産業革命遺産」がユネスコの世界文化遺産に登録されました。また、東日本大震災における復興活動を通じて両市は友好関係を育んでおり、平成25(2013)年2月に「北九州市・釜石市連携協力協定書」を締結しました。



今回の秋の特別展「官営八幡製鐵所『鉄の都のものがたりー釜石と八幡ー』では、

八幡製鐵所開業120年を記念して、釜石から八幡に至る近代製鉄の発展、製鉄業を軸とする両市の産業都市としての足跡、さらには両市の交流をたどっていきます。

<内容>

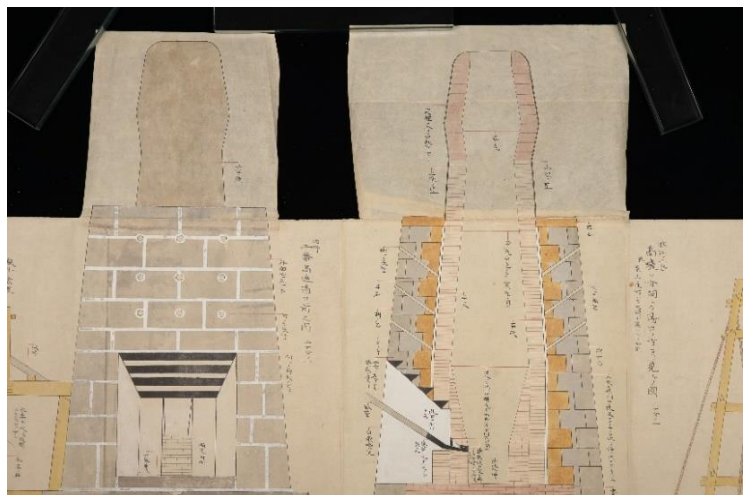
- 第1部 近代製鉄の誕生
釜石における近代製鉄誕生の経緯と釜石から八幡に至る近代製鉄技術の発展過程を紹介します。
- 第2部 鉄都の軌跡
鉄都としての釜石・八幡(北九州)両市の歩みと独自の生活文化や風景、東日本大震災後の両市の交流などを紹介します。



<会期>
令和3年10月15日(金)
～11月28日(日)
<協力>
日本製鉄(株)九州製鐵所
<料金>
常設展料金で入場できます。



「紙本両鉄鉦山御山内並高炉之図」作業編



「紙本両鉄鉦山御山内並高炉之図」設備編



ミュージアムのタネ

北九州市内の地層

流れる水によって運ばれた泥や砂などが堆積すると地層ができます。北九州市内では、様々な時代にできた地層を観察することができます。

市内に分布する最も古い地層は、三葉虫などが栄えた古生代という時代にできた3億年ほど前の地層です。門司区の海岸では、古生代の深い海の底に堆積した地層を観察することができます(図1)。この地層は、主に泥でできた地層からなりませんが、砂でできた地層もはさまれています(図2)。この砂岩層は、砂が一気に海底に流れ下ってたまったものです。砂岩層が何層もあることから、このような“事件”が何度も起こったことがわかります。ところで、流されてきた砂は、大きくて重い砂粒から先に沈んでたまりますが、これらの砂岩層は、上ほど粒が大きくなっています。これは、この海岸の地層全体が、堆積した時とは上下がひっくり返っていることを示しています。

北九州市内には、古生代の次の中生代の地層も分布します。小倉北区の山田緑地周辺などには、約1億3000万年前の湖の底に堆積した地層があり、恐竜や魚の化石が見つかっています。

さらに、市内では中生代の次の新生代の地層も観察することができます。若松区の海岸では、約3000万年前に浅い海の底で堆積した地層が大きな崖を作っています(図3)。同じ時代の地層は若松区の山の中にもあり、そこでは、潮の満ち引きによってできた地層も見られます(図4)。海は、およそ半日ごとに満潮と干潮を繰り返しますが、干潟などでは、潮が満ちるときはながしおひときながしおすなはこうすのの流れと、潮が引く時の流れが生じるたびに砂が運ばれて薄い砂の層が積み重なることがあります。図4では、それが細かな縞々として見えています。約3000万年も前にできた地層から、当時の半日ごとの出来事を読み取れるのです。

自然史課

地層担当芸員

御前

明洋



図1. 門司区の海岸で見られる古生代の地層。



図2. 図1の地層の一部を詳しく見た様子。黒っぽいところが泥岩で、白っぽいところが砂岩。下にあるのは1円硬貨(直径2cm)。



図3. 若松区の海岸で見られる新生代の地層。



図4. 若松区の新生代の地層中に見られる、潮の満ち引きによる水の流れでできた地層。